シリーズ
原発・いのち・みらい
その13

# 「原発・いのち・みらい」のプロジェクトチーム発足

副会長　大平　政樹（金沢市・外科）

第１回会議では保険医協会の今後の取り組みについて活発な意見交換が行われ、次回は出前講座の内部勉強会を行う予定（7月24日の会議の様子）

東日本大震災が発生して一年半が過ぎようとしている。目の前を通り過ぎる日々の風景は何一つ変わっていない。そう思える。

だが違う。確実に違うのだ。わたしたち、日本人の多くがあの時を挟んで、明らかに違う何かを背負って今を生きている。石川県保険医協会が問い続けてきたことは、一言で言えば、「今、何ができるのか？　何をすべきなのか？」それに尽きる。

今年七月二十四日、これまでの脱原発運動の一里塚とでも言うべき、新たなプロジェクトチームが発足した。構成メンバーは、協会で脱原発運動の中核を担ってきた理事、そして新たに加わった「原発の危険から子どもを守る北陸医師の会（以下、「北陸医師の会」と略）」の先生方である。当日は、代表である吉田均先生をはじめ、村田祐一先生、大浜和憲先生、計三人が参加された。すでにご存じの方も多いかと思うが、北陸医師の会は、ドイツの科学者たちが執筆した『チェルノブイリの恐ろしい健康被害　原子炉大惨事から25年の記録』を日本語に翻訳した組織である。北陸の小児科医を中心に三十余人が参加する。翻訳本の紹介は、会のHPに譲るとして、その衝撃的内容は想像を超えるものだった。翻訳は会の主要メンバーが分担して、まったくのボランティアで仕上げられたと聞く。子どもを放射線被害から守ろうとする先生方の意志と献身的活動に、ただ頭が下がる。要約もHPに掲載されているので、ぜひ一度アクセスしていただきたい。おそらく、福島の原発事故への意識が変わる。私はそうだった。

イントロはその位にして、当日の会議の内容を少しお話ししたい。

資料は、トータル二百ページを超えている。この資料を作成したのは、事務局の小野さんである。はからずも福島県伊達市出身。彼女が仕事を超えて、プロジェクトに打ち込んでいる姿は正直痛々しいほどだ。故郷への想い、東電・国への怒り。そして、原発利権と事故に翻弄される人々の弱さ、苦しみ。すべてを抱え込んで取り組む姿は、多分、今の福島に生きる人たちすべてと重なるものに違いない。

（一）会長あいさつ

今年の保団連代議員会での発言内容（右記）を紹介。協会が脱原発に取り組む基本的方針を説明し、この活動をさらに発展させていくことを確認。

（二）「原発・いのち・みらい」をテーマにした石川県保険医協会の取り組みを紹介。

これまで開催した講演会、機関紙でのシリーズ掲載など。

（三）吉田先生より、北陸医師の会の活動を紹介。

初回発行の千冊は、ほぼ完売する勢いで、増刷を予定しているとのこと。さらに福島原発事故での小児への放射線の影響を正しく評価するための方策を検討。

（四）プロジェクトの今後について

今後予定されているイベント、また、会議での提案は以下の通り。

①北陸医師の会のメンバーにもお願いし、機関紙へのシリーズ連載を継続。

②今年十一月十一日（日）に小出裕章氏の講演会を予定（二面）。

③映画「日本の青空」シリーズ第三作への協力（「渡されたバトン～さよなら原発～（仮題）」）。

④鎌仲ひとみ監督『内部被ばくを生き抜く』の上映会開催または共催。

⑤プロジェクトメンバーによる出前講習会。

⑥金沢大学小児科教授、谷内江昭宏先生による「子どもの被曝」の講演会。

⑦服部理事より、低線量放射線の健康影響を知るためにコホート研究を実施すべきとの提案。学会への働きかけを図る。

⑧志賀原発の再稼働に反対する団体との協力。

本シリーズに掲載されましたこれまでの原稿は、石川県保険医協会のホームページでも読むことができます。トップページ右下のバナーをクリックしてください。

## 12～13 年度 第１回保団連代議員会 発言通告用紙

| | | |
|---|---|---|
| 協会・医会名　石川県保険医協会 | （ふりがな）　にしだ　なおみ<br>氏　名　西田　直巳 | |
| ※1つのテーマにつき、1枚使用してください。 | （いずれかに〇をして下さい）<br>口頭発言<br>文書発言 | （答弁の要・不要について いずれかに〇をして下さい）<br>要　・　不要 |
| 発言テーマ | 保団連は組織をかけて脱原発をめざせ | |

**発言内容**

６月８日、野田首相は「大飯原発を再稼働すべき」と自らの判断を国民に示した。

越してはならない分水嶺を越えたと言っても過言ではない。この間、保団連は公害対策部を中心に脱原発のための運動を精力的に進めてきている。その努力に心より敬意を表したい。脱原発の運動は、決して政治的運動ではない。福島は無論のこと、この日本という活断層の巣の上に暮らす我々日本人の明日を守る戦いに他ならない。

石川県保険医協会は、福島原発事故の後、放射能汚染の実態とこれからを知るために、これまで４名の専門家を招き、勉強会を重ねてきた。特に現在進行形で福島の人たちを蝕み続けている内部被曝が如何に重大な脅威であるかを学んだ。北陸では、「原発の危険から子どもを守る北陸医師の会」も立ち上がっている。すべては、この事故が起こるまで原発に対し傍観者であり続けてきた自分たちに対する痛切な反省から出発したものであることをここに告白する。

我々には時間がない。子どもたちの明日を守るべき医療者たちは、未だにその力を結集しているとは言い難い。その現状に暗澹たる気持ちをいだくのは、我々だけだろうか？　保団連は、今こそ組織を上げて、その先頭に立つべき時だ。日医総研は、ワーキングペーパーの中で「福島を除く原子炉のうち、10 基がマーク１型、及びその改良型で、地震に対して脆弱である」と指摘している。共闘は可能である。保団連執行部の奮起を期待したい。

注１）発言時間は、２分 30 秒です。

注２）発言希望の方は、発言通告用紙に記入の上、当該協会事務局を通じて 2012 年６月１３日(水)までに必ずご提出ください。尚、期限を過ぎた発言通告は受け付けず、フロア討論の際に挙手でのご発言となりますので、予めご了承お願いします。

注３）口頭での発言は各協会・医会１本とさせていただきます。希望する発言にのみ、「口頭発言」に〇をしてご提出ください。